

二〇二四年度

中等部入学試験問題

国語(60分間)

【注意】

- 1 問題は、一から三までです。
- 2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受験番号				

氏名

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（現在では一般的に使われない表記・表現も出てくるが、原文を尊重した）。

インセンと知りあったのは、パリ大学で勉強していたところで、私たちはおなじ女子学生寮^{りやう}にいた。インセンがおねえさんで、いもうとの名はインインだった。ほぼ二年ちかく、おなじ寮^{かほ}にいたのに彼女たちの名字を知らないことが、いま考えるとふしぎなのだけれど、中国人だった彼女のインセンという名を漢字でどう書くのか知らないのは、もっとふしぎな気もする。たぶん、彼女にたずねたことはあるのだろうけれど、あとにもさきにも漢字で書いたことはまったくなかったから、忘れてしまったのだらう。もともと彼女たちは南シナにいたのを、日本軍が攻めてくるというので一家そろって越南に逃げたまま、ハノイからパリに留学していたのだった。

* 医学部の準備課程の学生だったインセンは、ふとめの体格で、色が黒く、度のつよいめがねをかけているせいもあって、まだ二十一歳^{さい}というのに、どこかオバサンじみていた。ひとつちがいのいもうとのインインのほうが、身だしなみがいいというのか、おしゃれなのか、歩きかたなども、インセンのほとんほとんといった感じはなかった。

寮費が安いこともあって、その学生寮には、当時、パリの他の寮には入れてもらえなかったもとフランス植民地出身の学生がたくさんいたから、値段が安いと聞いただけでとびこんできたフランス人の学生なんかは、寮生の肌^{はだ}の色^{いろ}のヴァラエティーにびっくりして、「こんなところ、とてもいられないわ」といつて逃げ出すこともあった。一九五〇年代の前半は、まだそんな時代だった。また、ヴェトナム人の学生がたくさんいて（ちょうどそのころダイエンビエンフウの戦争に負けてヴェトナムを失ったばかりのフランス人の側からいえば、ひどい学生寮だったかもしれない）、ドン・ガックとか、ゴ・ビンとか、シラブルの少ない彼女たちの名をおぼえるのは難しかった。しぜん、ヴェトナム人はヴェトナム人で、* マルティニック島から来ていたフランス名をもった黒い人たちは彼女たちで、あるいは東アジアの私たちというふうに、かたまつて行動することが多かった。

そのことは、でも、肌色の違いというよりは、食べものが違うから、といったほうが真実に近いのではなかったか。寮の経営者たちも、みんなが食堂に降りる朝と夜の食事ときには、なるべくおなじ国の人間がいつもおなじテーブルにすわらないよう気をつかっていたけれど、部屋は、だいたい、おなじ階にふりあてられていた。ひとつの階におよそ十人いて、廊下^{ろうか}のすみにあるガス台を共同で使っていた。みんな昼はたいいてい学生食堂に行つたから、たつたひとつのバーナーをいっしょに使うのは、日曜日だけ、そしてインセンとインイン姉妹の部屋は私のいた三階の部屋のななめ向かいだったから、私たちはフライパンをはさんで親しくなった。²

お医者さんになりたいインセンの勉強がどうも捗^{はかど}っていないらしいと、ある日、私に教えてくれたのは、韓国から来ていたマリイ・キムだった。彼女もおなじ階の住人で、インセンがある日、マリイの部屋に来て、つくづく大学がいやになったと話したのだという。こんどの試験に通らなかつたら、医学部は全面的にあきらめなければならぬので、彼女は必死なのだった。もし、だめだつたら、と私はマリイにたずねた。インセンは、ハノイに帰るの？

それがだめなのよ。マリイ・キムはそういつてきのどくそうな顔をした。インドシナの戦争がアメリカのせい^{*}でこんなになってしまったから、両親のところに戻るわけにもいかないんですって。マリイも、もとは北朝鮮^{きたちょうせん}の生まれなのを、戦争で南に逃げたのだったから、インセンは、日本人の私にはいわないことも、彼女にはうちあけるんだ、そう思うとすこしさびしかった。³じじつ、インセンは、軽い近視の私がたまにめがねをかけているのを見ると、いやな顔をしていった。メガネ、かけないでよ。日本のヘイタイを思い出すから。

ふだんはのんびりした顔をして、階段や廊下で顔をあわせると、ハアツという、鼻から抜けるような声を出して、ニタツと笑いながら挨拶^{あいさつ}をするインセンの境遇^{きょうぐう}が、じつはどれほど苛酷^{かこく}な苦勞や困難や孤独^{こどく}のかさなりを意味するのか、ぬくぬくとはいえないまでも親の仕送りで暮らしていたあのころの私には、考える力もなかった。その年の冬はことさら寒^aかったのだが、私たちはインセンの部屋におそくまで電灯がついているのに気づいて、折^ひるような気持だった。

冬がおわるころ、インセンは試験に失敗して進学をあきらめ、いもうとのインインは無事、薬学部に進んだ。ちゃっかりしたインインは、入学とほとんど同時に婚約^{こんやく}まで発表して、夏⁴までには結婚^{けっこん}するとはしゃいでいた。マリイ・キムが私をさそいに来て、私たちはインセンの部屋をたずねた。インインのいないときをねらつて、私たちはインセンをなぐさめるつもりだった。

あはは。神妙^bな顔をして部屋に入ってしまったマリイと私を見て、インセンはあかるい声でお茶をいれてくれた。そんな顔なくていいのよ。わたしは元氣だから。試験におちたからといって、わたし⁵がだめになったわけじゃないもの。そういうわれても、マリイと私はとても笑えなかった。だって、インセン、マリイが真剣^{しんけん}な声でたずねた。滞在^{たいざい}許可はどうするの。インセンは平然としていた。生きようと思つたら、どこだって、どうにかなるよ。勉強には失敗したけど、それが終りじゃないもの。どちらがはげまされているのか、わからなかった。

秋が来て、みんなが寮^{しやう}に戻ってきたとき、インセンが、まだインインといつしよにいたころの二人部屋をもらっていることに私たちは安心した。寮費をどうまかっているのか、そこまではおたがいに話さなかったけれど、やがてインセンは、どこからかキルティングをした木綿布をたくさん買ってきて、中国服の仕立てをはじめた。どこでならつたのと私が訊くと、いつものハアツという鼻にかかった声を出して、ばかだねえ、というふうに私をにらんだ。こんなことぐらい、親におそわつたから、できる。おもわずためいきがでるような、細かい、美しい針目で、彼女は綿入れの上下を、つぎつぎに縫^ぬいあげていった。文学部でうだつ^cのあがらなかったマリイ・キムと私は、インセンの部屋を訪ねるたびに、彼女の手さきに見とれた。

私が帰国することになった年の六月に、インセンも結婚が決まった。相手は、大学に近いモン・サン・ジュヌヴィエーヴの坂道でヴェトナム料理店を営んでいる、やはりヴェトナム生まれの中国人青年だった。インセンは、医者になるかわりに、レストランの女主人の道をえらんだのだった。

学生寮のホールで行なわれたインセンの結婚式には、マリイ・キムと私も招待された。中国人の神父さんが来て、式のあと、みんなで踊^{おど}った。白いサテンの美しい中国服を着たインセンが、夫になった青年と軽々と美しいステップを踏^ふむのを見て、私たちは、もういちど、インセンにはかなわないと思つた。

(須賀敦子「インセン」による)

* 南シナ：中国の南沿岸部。

* 越南：ベトナム。首都はハノイ。

* 医学部の準備課程：医学部に入るための学習をするコース。

* ヴアラエティー：多様性。

* ディエンビエンフウの戦争：植民地の独立をめぐりベトナムとフランスとの間で展開された戦い。インドシナ戦争。

* シラブル：音節。

* マルティニック島：当時のフランス植民地。

* こんなになってしまった：ベトナムが南北に分断されたことを指す。

問1——線 a「ことさら」、b「神妙な」、c「うだつのあがらなかった」の本文中の意味としてもっともふさわしい

ものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------------|------------|---------------|------------|
| a「ことさら」 | ア とりわけ | イ めずらしく | ウ いつも通り |
| | エ それなりに | オ いま思えば | |
| b「神妙な」 | ア すました | イ すがすがしい | ウ しおらしい |
| | エ 思わせぶりな | オ 取りつくるつた | |
| c「うだつのあがらなかった」 | ア うとまれていた | イ 将来に迷っていた | ウ 勉強ばかりだった |
| | エ ぱっとしなかった | オ 周囲の目を気にしていた | |

問2

——線1「まだそんな時代だった」とあるが、どのような「時代」だったと「私」は考えているか。その説明としてみっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アジアがまだ貧しく留学生自体がまれだった時代。

イ 戦争のため東洋人への差別意識が高まっていた時代。

ウ 植民地出身者が市民として認められなかった時代。

エ 人種差別の意識が平然とあらわされていた時代。

オ 西洋が植民地政策の正当性を強調していた時代。

問3

——線2「フライパンをはさんで親しくなった」について、以下の設問に答えなさい。

(1) 具体的にはどのようなことか。次の説明文の に入る漢字二字の言葉を自分で考えて答えなさい。

二字 を通して仲良くなったということ。

(2) この部分からわかることの説明としてみっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 肌色の近さがアジア人の強固な仲間意識につながっていたということ。

イ 同じアジアの文化を共有する者同士が連帯していたということ。

ウ 西洋人と親しくするとアジア人の仲間には入れなかったということ。

エ へんけん 偏見から身を守るためにアジア人同士で団結していたということ。

オ アジア人はやはり西洋の気候風土にはなじめなかったということ。

問4

——線3「すこしばししかった」とあるが、「私」は何が「さびしかった」のか。その説明としてみっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本と中国の関係を考えれば、インセンの不信感ももっともであると納得できてしまったこと。

イ 過去にこだわり現在を見ようとしないう態度が、インセンのような若い世代にまでしみついていったこと。

ウ 国籍や人種といった自分ではどうしようもない要素で、インセンとの親しさが左右されてしまったこと。

エ インセンが戦争で過酷な体験をしてきたにもかかわらず、自分にはその事実を隠していたこと。

オ インセンの関心は日本以外に向いており、仲間意識は自分の一方的な思いこみにすぎなかったこと。

問5

——線4「インインのいないときをねらって」とあるが、その理由としてみっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 幸福なインインの前でインセンをなぐさめるといふ、だれにとっても気まずい状況を避けたかったから。

イ 天真爛漫なインインが、インセンの気持ちを考えずにはしゃぎまわってしまうことが予想できたから。

ウ 優しいインセンがインインに気を遣って空気を出すのは、痛々しくて見ていられないと考えたから。

エ インセンの沈んだ声を聞かせて、インインの幸せな気分にならずに水を差すことはないと思いつたから。

オ ちゃっかりしたインインが、インセンを差し置いて幸せになろうとしていることに反感を感じていたから。

問6

——線5「わたしがだめになったわけじゃないもの」とあるが、インセンがこのように述べる理由としてみっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自身の能力が劣っていたわけではなく東洋人差別の結果だから。

イ 試験で個人の人間性や能力のすべてが決まるわけではないから。

ウ もともと医師ではなく手仕事の技術を生かしたいと思っていたから。

エ 戦争中の辛さに比べれば落第なんてたいしたことではないから。

オ 医師にこだわらなければ中国で不自由なく生活することはできるから。

問7

——線6「私たちは、もういちど、インセンにはかなわないと思った」とあるが、「私」はインセンのどのようなところに感心したのか。その説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦境にも負けずに前向きな考え方を持ち続けているところ。

イ 逆境を楽しむことができる精神的な強さを備えているところ。

ウ 苦しい状況を支えてくれる多くの友人に恵まれているところ。

エ 反骨心があり周囲を見返すためには努力を惜しまないところ。

オ 自分自身の才覚を生かして実際に幸福をつかんでしまうところ。

カ 豊富な人生経験から失敗こそが好機なのだと知っているところ。

問8

本文についての説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 対照的な中国人姉妹の生き様は、自由と平等を建前にした西洋社会が厳しい能力主義の社会でもあることを物語っている。

イ 国家間の過去のしがらみから解放されたアジアの若い世代の生き方を通して、差別や偏見が残る西洋社会を暗に批判している。

ウ ひとりの中国人留学生をめぐる話の背後には、戦争がどれほど個人の生を損なうかという大きな問題が提示されている。

エ 異国でたくましく生きる中国人女性の姿を見つめつつ、偏見や先入観から自由でいられない人間の姿をも誠実に描いている。

オ 人種も国籍も様々な若者の交流を描き、大戦後の西洋社会で古い価値観が刷新されたことを伝える貴重な回想録になっている。

二次のⅠ、Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答の字数については、句読点等の記号も一字として数える（なお問題の都合上、一部表記を改めている）。

Ⅰ* 資本主義社会で生産される「商品」は、人々の生活に本当に必要か、本当に重要かどうかよりも、それがいくらで、どれくらい売れそうか——言い換えると、どれくらい資本を増やすことに貢献してくれるか——が重視されます。

流行するとタピオカドリンク店や高級食パン店が町中に乱立してはあつという間に消えるのは、その典型例です。また、マスクや消毒液がコロナ禍で足りなくなりました。感染症流行に対する[＊]備蓄の必要性は専門家によって指摘されていたにもかかわらず、そのような¹無駄な商品[＊]を資本は作ってこなかったのです。

個々のメーカーを責めているわけではありません。これが資本主義なのです。企業としては、平時には需要が限られていたマスクよりも、もっと「売れる」商品を作らなければなりませんでした。ところが、いったんマスクが売れるとなれば、スポーツ用品メーカーやファッションメーカーなど畑違いの企業が続々と参入し、マスク市場は飽和状態に。今度は余って、叩き売られました。とにかく「儲かりそう」なモノを生産するのが資本主義の基本ですから、これも当然の成り行きと言えるでしょう。

ただし、「儲かるモノ」と「必要なモノ」は必ずしも一致しません。この点についてマルクスは、「商品」には2つの顔があると指摘しています。

一つは、「使用価値」という顔です。「使用価値」とは、人間にとって役に立つこと（有用性）、つまり人間の様々な欲求を満たす力です。水には喉の渇きを潤す力があり、食料品には空腹を満たす力があります。マスクにも、感染症の拡大を防止するという「使用価値」があります。生活のために必要な「使用価値」こそ、資本主義以前の社会での生産の目的でした。

しかし、資本主義において重要なのは、商品のもう一つの顔、「価値」です。

「商品」になるためには、市場で貨幣と交換されなければなりません。交換されない椅子は、座れるという「使用価値」しか持たない、ただの椅子です。それに対して、「商品」としての椅子は、市場で1万円の値札がつき、500個の卵や2枚のシートなど別の物と同じ価格で交換されるわけです。なぜでしょうか？

椅子や卵、シートの「使用価値」は、全然違います。卵と椅子、どっちが役に立つでしょうか？ お腹が減っていたら卵かもしれませんし、仕事をしなければいけないときは椅子の方が役に立ちそうです。「どっちが役に立つか」と使用価値を比較しても、一向に、なぜどちらも1万円なのか理解できません。有用性だけでは、なぜそれが5000円ではなく、1万円なのかわからないのです。

椅子や卵、シートはどれも同じ「価値」を持っていて、それが1万円として表現されている。マルクスによれば、この「価値」は、その商品を生産するのにどれくらいの労働時間が必要であったかによって決まるのです。つまり、椅子や卵、シートにも同じだけの労働時間が費やされているから、同じ価値を持つものとしてどれも1万円で交換される——これが、「労働価値説」です。

（中略）

「価値」と「使用価値」も、言葉が似ているので混乱しそうです。でも、まったく別物であることは、空気のように、それなしに人間が生産することのできない使用価値の大きなものが無料である一方で、ダイヤモンドのように使用価値の小さなものが非常に高価であることからわかるでしょう。空気は人間の労働なしに存在するので「価値」はありません。一方、ダイヤモンドの採掘には多くの労働が投入されるので「価値」は大きくなるのです。「使用価値」の効能は、実際にそのものを使うことで実感できますが、「価値」は人間の五感では捉えることができません。マルクスも「まぼろしのような」性質だと言っています。日常生活では商品に「値札」をつけて、かろうじてその輪郭をつかむことができますが、目に見えない不思議な力が、身近な商品にはあるのです。

Ⅱ 「商品」の持つ2つの顔を区別すると、資本主義が様々な矛盾や不合理を生み出すメカニズムをすっきり説明することができます。

資本主義のもとでは、いくらで売れそうか、どれくらい儲かりそうかが大事です。つまり、価格という形で現れる

「価値」の側面ばかりが優先され、肝心の「使用価値」は二の次になる。例えば、地球やお財布のことを考えれば、環境に配慮した素材を使って、長く使える商品を作るべきです。ところが、実際には、ファストファッションのように、環境負荷を無視して、安さを追求した洋服で、私たちのクローゼットはあふれかえっています。「儲かるモノ」(価値の側面)と「必要なモノ」(使用価値の側面)がここでは乖離しているのです。

「価値」に振り回されているのは消費者ばかりではありません。資本の側が「売れそう」だと思って作っても、ヒットしなければ大量の在庫を抱えて倒産してしまうこともあるでしょう。それなりにヒットしたとしても、タピオカや高級食パンのように、追従する企業がたくさん現れて供給過多になれば、やはり売れなくなつて、経営難に陥る可能性があります。

(中略)

「使用価値」のために物を作っていた時代は、文字通り、人間が「物を使っていた」わけですが、「価値」のためにモノを作る資本主義のもとでは立場が逆転し、人間がモノに振り回され、支配されるようになる。この現象をマルクスは「物象化」と呼びます。人間が労働して作った物が「商品」となるや否や、不思議な力で、人間の暮らしや行動を支配するようになるというわけです。

なぜそのような不思議な事態が生じるかというと、人々はお互いが作るものに依存しているにもかかわらず、社会全体としては誰も生産を調整していないからです。みなバラバラに労働しているせいで、自分が作っているものが完全に無駄なものだったり、逆に、みんなが必要としているものに全然足りなかったりする。結局、作った商品を市場に持って行って、それがどのようにに他者に評価されるかを見ながら、何をどれくらい作るかを後追的に決めなければなりません。

(斎藤幸平「ゼロからの『資本論』」による)

- * 資本…経済活動を行うための、元となる資金。
- * 備蓄…万一に備えて、たくわえておくこと。
- * 需要…ある商品を買おうとすること。
- * 飽和…最大限度まで満たされている状態。
- * マルクス…ドイツの経済学者(1818～1883年)。
- * 輪郭…物事の大体のありさま。
- * 矛盾…つじつまの合わないこと。
- * 肝心…大切なこと。
- * ファストファッション…最新の流行を取り入れながら低価格に抑えた衣料品、またそれ売る会社。
- * 乖離…はなればなれになること。
- * 追従…あとにつきしたがって行くこと。
- * 供給過多…欲しい人は少ないにもかかわらず、その商品がたくさんあること。
- * 依存…他のものをたよりとして存在すること。

問1 ―線1「無駄な商品」を資本は作ってこなかった」とあるが、筆者はどのような商品のことを「無駄な商品」と言っているのか。解答用紙で指定された字数で言葉を入れて、説明文を完成させなさい。なお、「使用価値」という言葉を必ず用いること。

問2 ―線2「価値」は人間の五感では捉えることができません」とあるが、それはなぜか。I文中の内容をふまえ、解答用紙で指定された字数で言葉を入れて、説明文を完成させなさい。なお、「労働時間」という言葉を必ず用いること。

問3 ―線3「不思議な事態」とあるが、それはどういうことか。解答用紙で指定された字数で言葉を入れて、説明文を完成させなさい。なお、Cには「変動」という言葉を必ず用いること。DにはII文中から十五字以上二十字以内で言葉を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

三 次の問いに答えなさい。

問 1

- ①～⑦の文中にある——線のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。ただし、カタカナに送りがなが含まれるものは送りがなをひらがなで答えること。
- ① 他人にキガイを^{あた}与えるような人にはなるな。
 - ② 新商品を売るため、センデン活動にいそしむ。
 - ③ 飛行機のソウジュウシになって、空を飛びたい。
 - ④ 検査の結果、消化キカンに異常が見つかった。
 - ⑤ 学級会の司会をツトメルのは、いつも委員長だ。
 - ⑥ 二つの国の間で安全ホシヨウ条約が結ばれた。
 - ⑦ 空気がきれいな土地で養生する。

問 2

次のことわざ・慣用句の□に入る語をそれぞれ考え、二回以上使われているものを、後のア～キから二つ選び、記号で答えなさい。

- も □ も出ない（できることが全くない状態のこと。）
- は □ ほどにももの言う（言葉を使わずに気持ちを表現するということ。）
- に □ を置く（心を落ち着かせること。じっくり思索すること。）
- と □ の先（非常に距離が近いこと。）
- □ をおどろかす（世間に衝撃を与えること。世間の関心をひくこと。）

ア 目 イ 鼻 ウ 耳 エ 口 オ 胸 カ 手 キ 足

〔以下余白〕